

Music

1972年の夏、サンフランシスコ。
「グレートフル・デッド」の実体験

Text & Photos: George Cockle
文・写真 / ジョージ・カックル



高校一年の夏休みのことだ。俺は親とサンフランシスコに滞在することになり、偶然同じ時期に行っていたアメリカ人の同級生と合流することになった。そして、二人でサンフランシスコ近辺をヒッチハイクしながら遊んでいた。そんなある日、郊外の街サンラファエルからサンフランシスコに向かってっていると、俺達は突然、とある高速の出口で降ろされてしまった。そこはアメリカには珍しく、出口と入り口が近くない。仕方なく俺達は次の高速の入り口を探しに歩き始めると、どこか遠くから音楽が聞こえてきた。どうせヒッチハイクの旅なんて予定はない。何だろうと思いつつ、音の聞こえる方向に歩いて行くと、トラックが荷物を降ろすローディングドックの前に10人ぐらいのロングヘアの若者達が集まっていた。彼らはその音楽を聴きながら、踊っていた。誰かなと思ってもっと近づいて見ると、奥にあるアンプの上に真っ黒なひげの熊みたいな人がいた。お～、ジェリー・ガルシアじゃないか！ 周りを見ると、俺が大好きなバンド、グレートフル・デッドのメンバー!! 彼らはライブの練習をしていた。聴いたことのない新しい曲もあったが、アルバム「アメリカン・ビューティー」の曲が多かった。見たこともないグレイ

フル・デッドのライブ。こんなところでリハーサルを聴けるとは、すごい。そんなところに迷いこんでしまった俺もすごい! しばらく、というより、何時間もそこに釘付けになっていた。彼らはその頃すでにスタジアムでやるような大御所だったのに、ガードマンもマネージャーも付けずに練習をしていた。手を伸ばせば届くほど近くにいるなんて、本当に信じられなかった。

そして10年後、俺は再びアメリカに住むことになった。住んだのは、あの若いときにヒッチハイクして回った街、サンラファエル。理由もなく男らしい仕事をしたかった俺は、車のメカニックの学校に3年間通ったあと、いくつかのショップで働いた。そして26歳の時、あるショップから引き抜きの声がかかった。そのショップに行ってみると、あのグレートフル・デッドを見た建物の真ん前にあった。運命だな、と思った。人間って不思議と縁のある場所に戻るという。俺は迷わずそのショップで仕事をすることを決め、俺は4年間ほどそこへ通った。毎日のように、昔のことを思い出した。グレートフル・デッドの音楽を生で初めて聞いた時のワクワクする気持ちを。そして、彼女の家の前を通るかのような感覚を味わった。今では、日本でこの話を飲み

屋で話しては、盛り上がっているけど。でも本当に、あの時のことは忘れられない。

今、ジャムバンドというジャンルのミュージシャンは山ほどいるかもしれないが、彼らのようにきちんとした曲を持ちながら、バイブレーションで演奏がひとつになっていく本物のジャムバンドは数少ない。最近よくあるダラダラと演奏し続けるジャムバンドとはまったく違うんだ。なかでもアルバム「アメリカン・ビューティー」は、アコースティックのカントリー、フォーク、ポップの曲がたっぷり詰まっている。ライブのときは一つの曲が次の曲へ移る時、すぐに入ることもあるが、なかなか入らない時もある。でもそれが、ぴたりとハマる時は鳥肌が立つほどだ。CDではそんなふうには感じられないが、生で見ると、波乗りでボードが滑り始める時の瞬間と感覚を覚える。音楽にもそんな感覚に陥るときがある。滅多にない体験だが、いいジャムは波乗りに似たバイブレーションを感じさせ、本物の感動を与えてくれるんだ。



ジョージ・カックル ●60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com